

天草方言で読む【おくの細道】 松尾 芭蕉

鶴田 功〈訳文〉



〈序文〉

月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらえて老をむかふるものは、日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。

予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず、海浜にさすらへ、

去年の秋江上の破屋に蜘蛛の古巣をはらひて、やゝ年も暮、春立る霞の空に白川の関こえんと、そぞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて、取もの手につかず。

もゝ引の破をつゞり、笠の緒付かえて、三里に灸すゆるより、松島の月先心にかゝりて、住る方は人に譲り、杉風が別荘に移るに、

〈草の戸も 住替る代ぞ ひなの家〉

おもて 面八句を 庵の柱に懸置。

〈意訳〉

月日ちゅうのは、永遠に旅バ続ける旅人ンごたるもんで、来てにや去り、去ってにや来る年もまた同じごて旅人である。

船頭として船ン上に生涯バ浮かべ、馬子として馬の轡バ引いて老いバ迎ゆる者ナ、毎日旅バして旅バ住処にしとるごたるふうですたい。

古人の中じゃ、旅の途中で命バ無くした人があまたおらす。

私もいくつごろからじゃいろ、ちぎれ雲が風に身バまかせて漂うととば見たりゃ、漂泊の思いバ止むることがでけでにや、海ぎわン地バさすらい、去年の秋にや、隅田川のほとりんあばら屋に戻ってクモの古巣バ払うて、いつとき落ち着いとったばって、おいおい年も暮れて、春になり、霞ンかかる空バ眺めながら、ひょくっと白河の関バ越えてみゅうかになて思うと、さっそく「そぞろ神」がのりうつって心バ乱し、おまけに道祖神の手招きにおうては、取るもんも手につかん有様じゃった。

そがんわけで、ももひきン破れバ繕い、笠ン緒バ付けかえ、三里の灸バすえて旅支度バはじむっと、さっそく、松島の名月がまず気にかかって、住まいの方は人に譲って、旅立つまで杉風の別宅に移るこてえして、そん折に、

〈人の世の移ろいになろうて、草葺きのこん家も、新たな住人バ迎えるこてなる。これまで縁のなかことじゃあったが、節句の頃にや、にぎやかに雛バかざる光景がこん家にも見らるっじゃろう。〉

ちゆて発句を詠うで、面八句バ庵の柱にかけてゑえた。

芭蕉の有名な句

古池や ^{かわず}蛙 飛びこむ 水の音

名月や 池をめぐりて 夜もすから

夏草や ^{つわもの}兵 どもが 夢の跡 : 岩手県平泉町

^{しずけ}閑 さや 岩にしみ入る 蟬の声 : 山形県・立石寺

五月雨を ^{さみだれ}あつめて早し 最上川 : 山形県大石田町

雲の峰 いくつ崩れて 月の山 : 山形県・月山

荒海や 佐渡によこたふ ^{あまのかわ}天 河 : 新潟県出雲崎町

花の雲 鐘は上野か 浅草か : 東京都

初しぐれ 猿も小蓑を ほしげ也 : 三重県伊賀市

旅に病んで 夢は枯野を かけ廻る : 辞世